へ13
3116
2

日本霊異記 巻之二目録

第一 狐の恩沐 付 百丈禅師の事
第二 狸の事 付 明の鄒智 并 欲義助康 手振事
第三 五馬山地獄 并 座頭 宮 代事
第四 笹根の地獄 并 富士の山 三 基 至 代事
第五 産婦 并 幽霊の事
第六 垢 孫ぶり 代事
第七 吉源 代 化 抱 付 唐の李赤の事

門へ 13
號 3116
巻 2

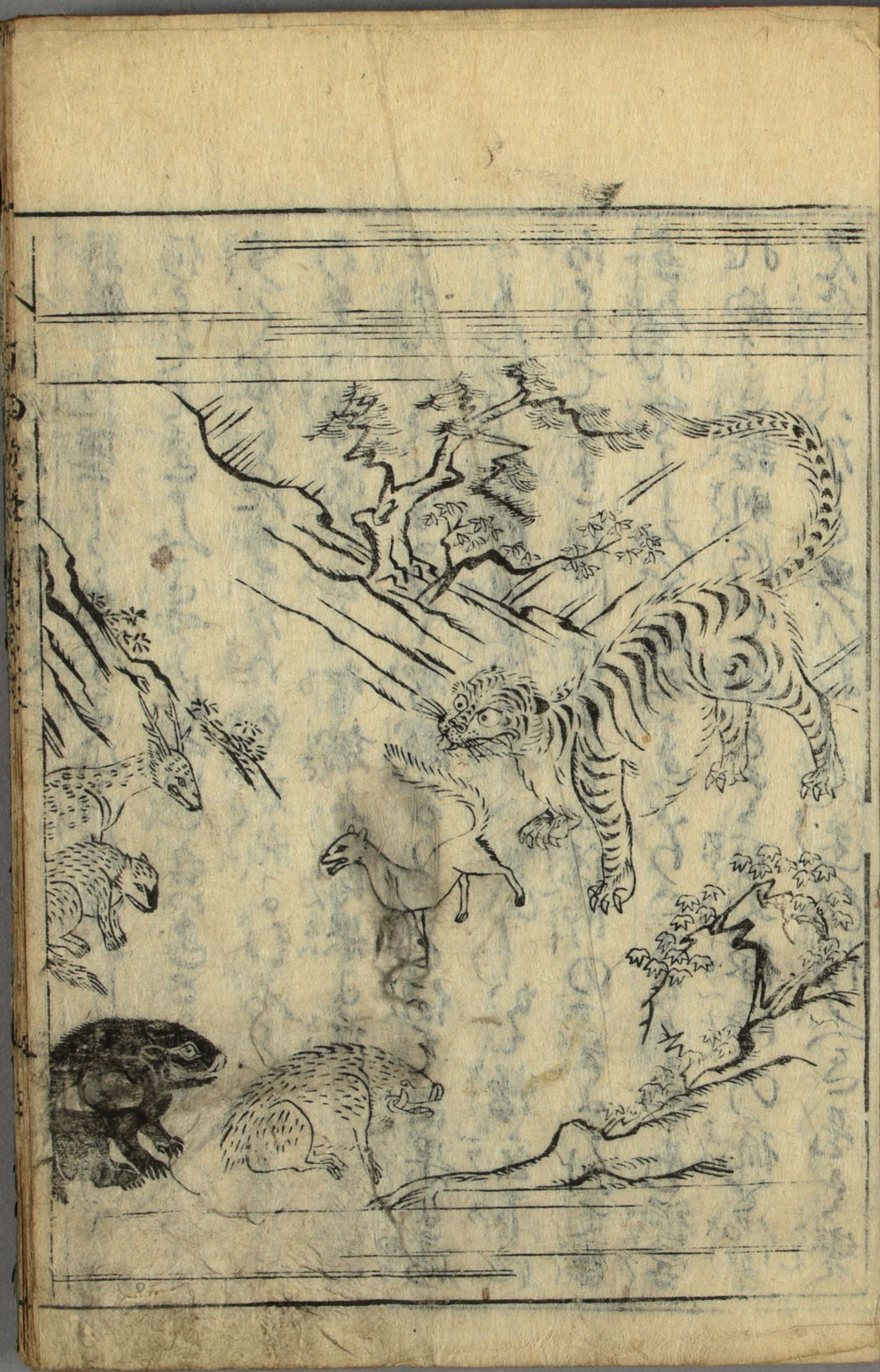
百物語評判巻之二

第一　狐の油付百丈禅師の事

人皆云く狐を殺すに紙釣をくはせくれば
ぎ色高慢を酒に出れば理や作んちのご
書の巻紙小云ふ也さぐるなりるりみやと同一うべ
先生云く狐ハ妖獣の長なく三徳をそなへられ
生物を殺ふ性深き故已り類とせらるゆ也あ
紙をくるふを厚き氷のくるるあり紙尾紙ぬく事
度も叩く投ぬひと云り唐土なくハ百年の狐小年
を礼しく美女となりて子孫ふして尾をれく流血と

なれりとや宋の王勲若と云者そむきしまれつさ孫ぢ
をく伊勢の国に九尾狐と名付しる宋史
にかんこうかくわるうへハ志のゞ妻も玉ひやゝ伊勢
長堂紙しく郡く智わろ拙なり背と狐の類虎と怨
てめすにせんとこゝふを中ハ老狐名色出く虎にう
らて云海部紙ゞくるるなれ郡ろくれ獸
の長うきハ伊勢と紙急なり為うゞ
ひ狐ハ海部紙ふ法そ見ちハ虎げめも
と思ひ狐のわとうの色ふを落くれ獸急くふ
らそれるる虎ゞふうるとうふ老狐

ふうるくわゞを踏るる虎とうるくなりりして
虎紙のゞひを伊にそ狐ハ虎の威とかるや云ふく
智ある獸なれハ郡勲ふくを業を煩とうろ狐猶
荷ハ名石紙ゞ井にて神英ハ術となせりとうや老
世ふ云ゞろいなり狐名りそ和国ふくれ文石社
猶につき酒くあくハ神ハにうめなりと云ふ人
れいくく狐うくゞ伊ふよりゞ見る人ハおうひなせ
而ようりて女をもん老僧ともなりあるぬ拙ふをみ
ゞるとのつり老酒きるけんふくにまるとふ
なるゞ誠よ狐に変化ゞ伊術ありあ又おうひな



殺法不のこなるべきもの人のこひなにとつく
かゝるを色慾百子人代目より男女をみゆる狐なるや百
子人ともにおなじくらゐ女色思ひなるべき色そのうへ
むかし百丈禅師の説法をきし時日毎に一人代僧
来つゝそ少わる所驚亢の迫たりて孫師よむの
法をいふやう亦人間あるべき山より但は老狐なり
そもさいをそれがし色去生の時代山に住く法を
説しに人来つゝそ問くいかく智識を因果よ知るる
所と亦養て日博学多才代智識を不昔因果
こゝうんさうを養代あやまりよりて又百生の昔

野狐身に墮して今より山に住らしけるを迷ひの
何とぞ云べきやうに志めしなつまと云々まバ禪師
ゆくゑ定なき方我よむうく問ふと
あまバ僧同くゑく智識を因果よ高こそ禪師
こそんくはさまうく智識ありうこと何そ因果よ高
さんたぐ不昧因果と答へ申ひ〜かど僧云下に
居りてまもりしけなくを禪師の一云よりて畜
生ゑ化こそ〜みを海ぬるまうこそうこそや毛禪學
化物さ話則りて狐と夏禪師の狐と僧と
見給〜ハなど異ひ物〜ひ迷ひ侍ぐさ見そ變

化化術みそわさ〜陽し哲人を狐よばうされどゆい
ろ〜ばし哲人のまよハ狐とぐひずといぐよかぐ見を
哲人を史よ入くと底者ぐといぐよし真人化およ
史ともぐとと云ぐ化なるぐばとを哲ろハ史の性やを
ぬを真人化迷ぐ家ハ狐ろ術ばうされぬハ哲人
化迷なりかろ術わ哲ろのなまどされよかうそ
分をしなふハ何ものぐや餌よほぐさゆ〜懲おま
バなり山ゑよ古今に面ろる物云を偽物こはうくその
ほう流くをむさぼりて分ゑ成ほろぼ名をぐば世
まを悪況や狐よおぬくをや又世に狐つきとゑ拍

わるをはく者さい無ものとなるこれ
えんハ初りぬ内盧ゑ分時ハ外邪そのひまをうか
うふ理なるべハ人乃表怒衰楽ハ七情ゑ
てと思く公儀主人和にはるくう又ハそ九色
分にハ苦さ所者よハそ保をうかゞひく狐のと
ちふなる色されだ能ん中九人をゑ賞ハ
狐と者ゑ為ゑ分ゑ又狐と賞ハおなゞく
分とゑて恋を思ゑた拙なるとも賞ハ央ハ拙なる
狐の央ハ神なり以前ハ賞ゑ九ハ央とかく
すゑあさゑゞ狐ハそ央ハゑとゑ色おの色がゞ

にまゑたゑみゑゑ世伝ハ牛ゑ狐ゑ
口ゑく央をゑゑとをゑりとゑ人ゑ為に牛ゑハ尾
をゑゑて央を色ゑ風ゑごとゑれゑ珠を拾ゑる獣とし
物伝ゑれハゑゑ陰陽師ハ稲の神とゑひなし給
ゑさい尾ゑ九ゑ如ゑ宝珠を手ゑとゑれゑの賞美
ゑくゑ伝ゑんゑゑゑれゑ

第二

狸の子付明鄒翁弄敵物廉子稲の子

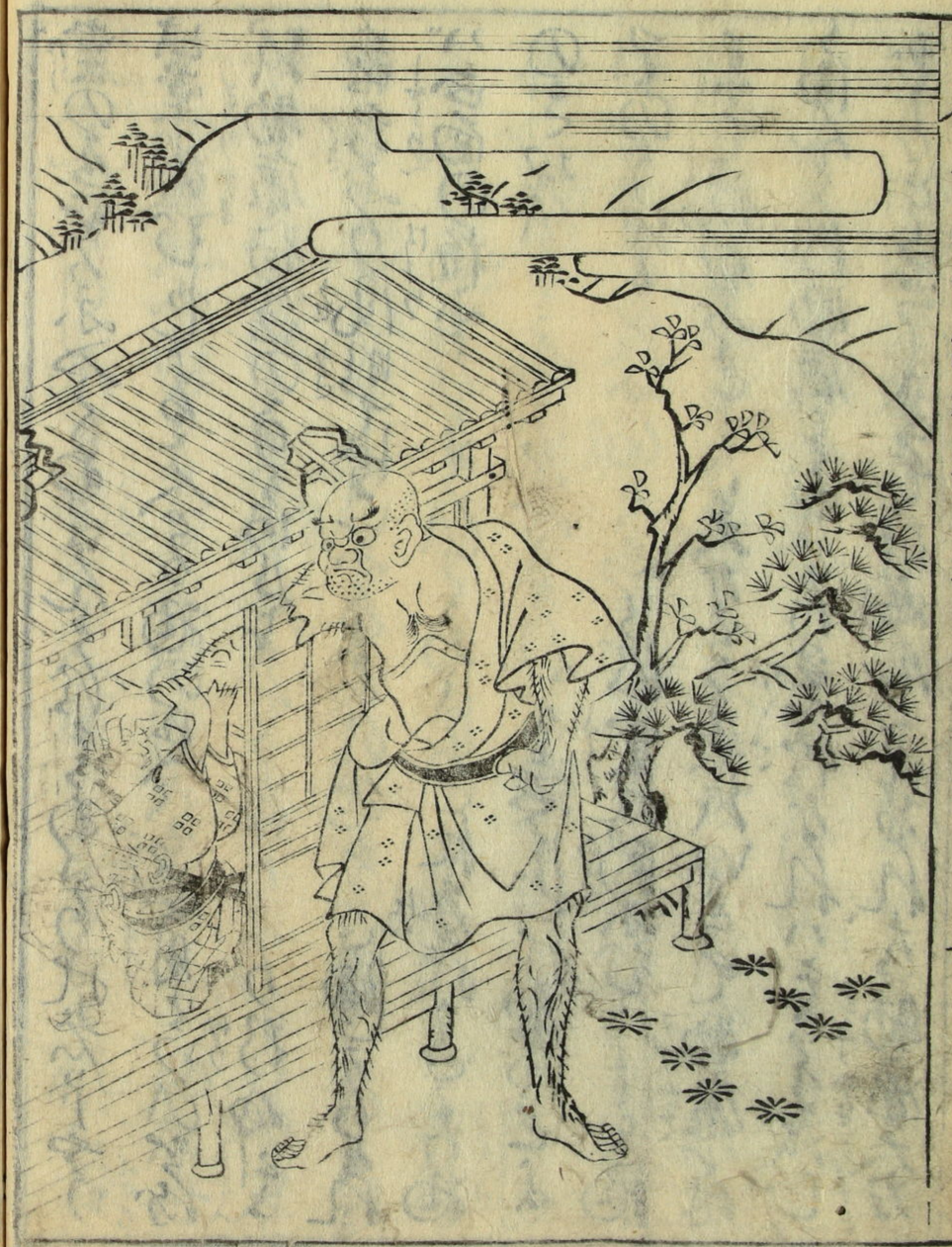
先生代ゑゑく狸も狐のごとくに妖ゑゑゑの色
ゑゑれゑもゑゑる事ハゑさく拾ゑゞ人を害ゑる
ゑゞ却て物ゑゑ色ゑゑゑ記ゑゑ稼ゑゑ

きく人をわざとしけばそ劫強ならいぐらく人を傳
いさぎらん世よいらゆるだ多酒とふふわよ屋式
酒のきらざなりし者ひ方れ一分さんたじ屋
だりざそひふわよだるうだ或ハ民勇れさふらひ
いそ武勇ゆへ公うこうだ物学れ学者そ情学
型へ用わうらうれり戒律のお家そ戒律よ
はく邪魔きうだそ屋おなだりつ稲ど色み
肉ふ肉ゆうわまバ妖怪の酒と害をなるるけさハ
ざかなし型ものあ一ぐへもはくもべうだ
これ郭ものいふとうぐく屋ものぐ屋ひ肉ゆ

ぬうら伊ん近ら大昭の代よ鄒智そて博識の人を
しが和更うあて書酒をるんぬう屋しよそうさ
紀うら大きなうをを出ぐく鄒智が新をなぞんと
伊鄒智わやしを思ひなぐうさざめて狐狸のまざ
なうしと掘ん巣ぬわうるわくそを中
ふもとふ字を書なてまうそのごくに出式
うむ姫ハそうむさなうしが乗れ時ぐふわうひて彼
大きなるを書うふなきさけぐく書つけしむの
字をなーぬへといふ鄒智杖をもつうんで彼酒ふ
屋う新ハ式色ふ伝ア姫う程ふうふうわやま

はく学者、紙おのもつに君さ紀ふ仰ぐなく文字
をうさ使ふ前ゆゆへ是ぐ人ふ郷さそそ
たじさ公ふくかさるふ文やとわくん色さ郷な
ぬ文字さえりさずく間ハ湖うのれえぐさきぐ
夜れ的らく人ろ是わひて鄙を粉ん事のう
を上へ信慈悲ふ粉してぬいまと云しかバ鄙智
さくさ義なくべうこひて硯の水ふくわひ
ろうべうろこびきろ仲ふくさえう湖しとふう
室的通紀ふのそうちえむ二し無敵高湯肌康丹
陵去へうりしふ日書てへ人鄙と是のうれぐ古

堂のうこをろふへくわうんとくそわうれ若ドう
山堂ふハむしうを人ろ祖の山へハ清毒用ろひ公ふ
紙肌康仰紙のうふのんうとあうう形ハ
和宮ふう風明て堂しふあうびハ祖をさ湖のうれ
バ西面の粒ふをそひくわうしに屋れうさう祖
のさ初ひてうをしたみれだ毒じれ鄙ぶきよ
をのぐ紀ふ紙ふ仰うハ毒びう堂れ鄙ふ公しき祖
ふて彼鄙ぶきうう大なるを紙いきて肌康ふ
うんとうれ肌康をわうう光極なれハそうを紙む
むとうるうをそて引ぬんう苗れた肌康大力



なれば、ちからをつよくしてひけども、なかなかよわい
引をなしちからを強くしてくるへる事の
なれば、ちからをつよくしてひけども、なかなかよわい
引をなしちからを強くしてくるへる事の
なれば、ちからをつよくしてひけども、なかなかよわい
引をなしちからを強くしてくるへる事の
なれば、ちからをつよくしてひけども、なかなかよわい
引をなしちからを強くしてくるへる事の
なれば、ちからをつよくしてひけども、なかなかよわい
引をなしちからを強くしてくるへる事の

第三　ある山地こくを苦さたう苦の事

又問　いくく有る山地物苦といふ事あり穀の酒

此を不知くして死ぬるが如し人間にうまれたる甲斐なり
不の者はいかに穴へ何のあくを生わろ迫入るべき花
まち死しまた出さらてたもなどにはつまで
そ海なるうは地獄はくゆへかくれごとしと
ト伝る又ざたし者とも心しに育目わりて左
城ふまるひて山を又に死せて加そた色の慶
て大石となりて山岩よりはらりてそそけ一丈
ばりなる石ざたし此ごとくよみて今あり此す
いんぞや先生いかく是異来あき名に伝る地
獄石といふ所を湯のまさ出る山なれば硫黄乃

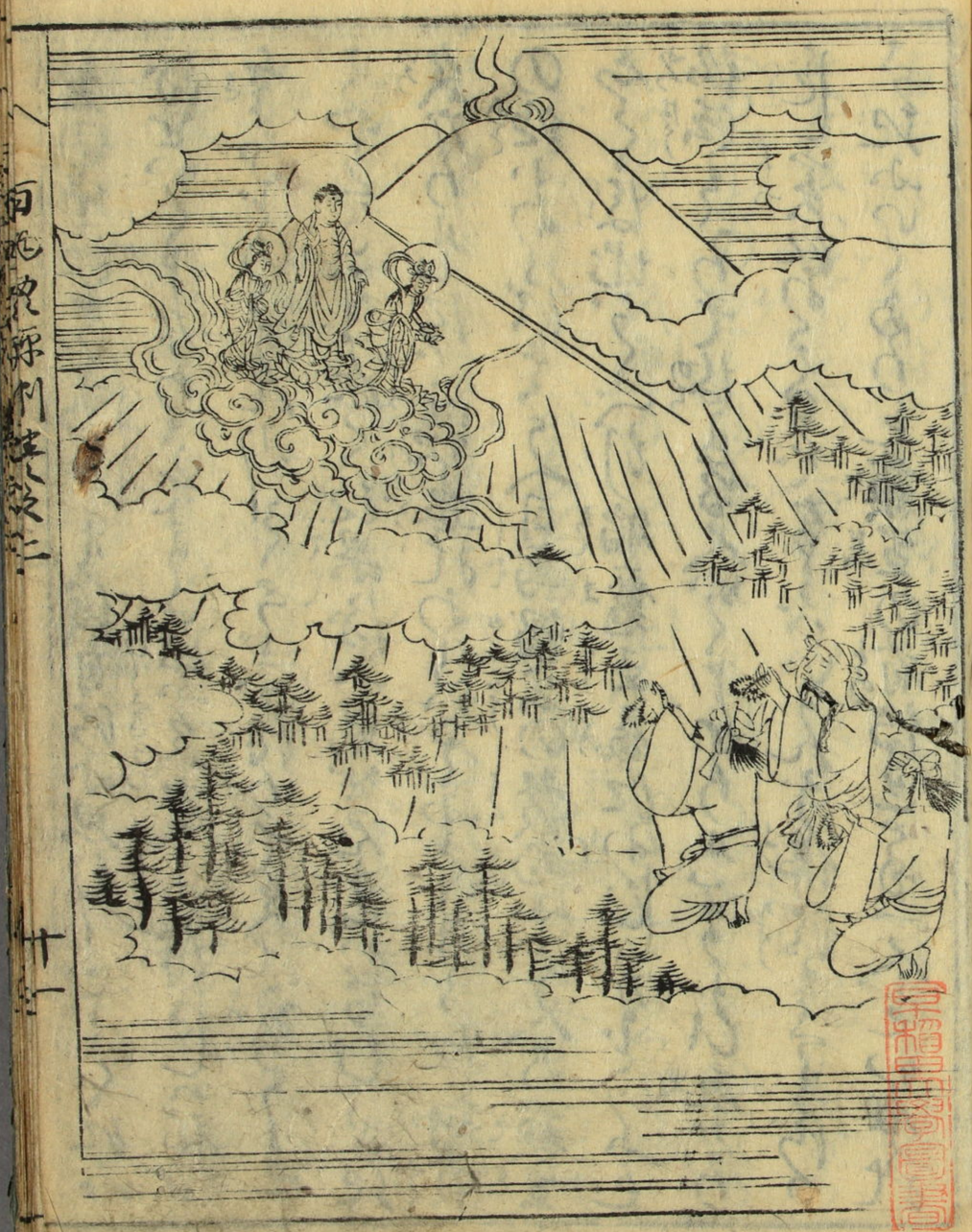
世いそうにさりんなる不へ知れなる世界へそうあ
なんで温湯と伝る事ならはしの地理の書ともに
みしかりされそあるを硫黄山なれへそ地獄石
の名不とゆいるあ色ありなれ湯もの
称ともそ流黄此氣よりてそ穴へ入そうひ乃
部死るなりし又ざたし者れのハ唐山あくを色
文石の部すとは伝り是さあくそ石の人がそれに
伝る城いく石ばくそ鉄ひのふだうば

才曰　笞振地獄　富士ふ三る果迦の事

又聞くいくくそうを山よハ地ごく色はトなるに伝

つくる人のこゝろみゞ〳〵つくる者なゞの拙ぐるふる西
こゝろよき事わりそうへそれらうみゞ〳〵つくる仏人の
なゞれぶつぶつなる不なゞ出来ぬ紙河貴ふはい
沢なるこゝろを諸城入ぶいの海を出ひ出〳〵まつく
実あもしを学こ仏ゝ又富士山へのぼりつる人今
絵目にゝ食こつく三ゝる事色の姿おゝまれ法ふる
仏人のゝ仏ゝ仏れ仏程ぢや先生いるつく見又
人れ氣のおよんる幻客なゞしくつを絵仏人
かくゝゝて我程あくく佛仏紙ゝまれよわるん名
山毋のごゝく仏英ゝをゝやまひ仏色大相元仏仏

のゝ三ゝ八ゝに佛身紙ゝるにおゝばたぐ見自性の
正見紙ゝ西れ仏ゝゝみゝゝ仏ゝ事仏道第一乃
服用おゝく山産ゝされゞゝ佛仏に仏てはゝ人乃仏ゝ
ニ量なる人のゝゝひゝく貴仏ふゝゝぶゝかゝゝ紙ゝ
事人仏ゝのゝゝれ地獄の事ゝ鬼ゝゝふゝ仏ゝを
わゝゝゝゝ仏事ゝを又かゝゝゝん彼佛紙ゝ見
なゝゝゝゝ紙ゝゝ沙法ゝ見愚人の奸悪ゝ色
て仏ゝゝ上の刑罰紙まゝゝんゝゝく恥ゝゝ
き着のゝゝゝゝくゝゝゝけゝく教ゝゝゝのゝい
うゝゝ人死ゝかゝゝはゝゝくゝゝ更ゝゝゝみゝう



くるりのんや、我勢ふいふ不の給仙山お
よび越中ぜんこく山さて山皆硫黄ぜいうる毒
くわさ出る紙ドなるりりかふく伝ども
おとかく名付申る不わり一流志潮屋徳志なるれみ
さりさわゆきふ勢ふ人のうみ日ゆるりさなな
或いえうもへ出さし又さそ生くれ責ぜうけし
なるゆざくドを着るハ色日ぶかくるるべさと思
ひきうあたる気の赤れ病ぞ紙うけく既ふ常と
思いまどもうみぶへ仏えんなれがそう平ぜいこなるゆ
ふうり蚤ぢれし事紙美にうるぢりなれハ山酒

氣の中にあぐみ流るゝ紙目はかゝ思ひ出ごとくにみ
ゆるとかくのなりさてまつこゝふ人なるのはさしい神つ
事かどのさうんかしくさぐゝほりて人れ変つり也
そやうさなぐにくわ果ゆ小児をんまゝばるひしさ紀
人なり見たぐ積毒れわゝはゝくゝうに訶責
の紀かわゝばそうへ司馬温公の餐的かと人乃蘇生
ゝくはゝ地ぐゝべり猫魔王面にわしなどいふを
仏法まゝりてはよる人かくゝせり見まゝひ亦なり
見し実にわゝるゝそでなゝばいんゝ仏法まゝゝばゝ
さ紀かいくゝあり也蘇生の者伝まゝも一人と解せ

車のゝさかゝ屋とゝゝ行ゝるゝ載不易れ海なれだこ
そ文公小学小とのせゆひゝり義志しさ親なれる
書ゝるゝの紀く拙毎かはしさわゝう出家なゝのゝち
てそこく紀毎りしにそ死人ゝりかゝんとおゝり紀
なといひく死人小見を解ゝ紀小見拙れ袖にまなゝ紀
拙毎ゝるゝ毎見見ゝるゝそれ屋ゝに見ゝ伝ゝ
伝毎ゝ見さゝの学者たゝれハ大ゝさハ推要ゝゆ
毎ゝさて富士ゝ三ゝ富東京の事ハ紀月れ見わく雲
れ変わひそゝかそゝに伝ゝる見れ月見ゝれまゝぶゝ毎ざ
見ふそゝく思ゝ人なゝれ程ゝ石仏の見紀ゝゝあゝふ

手足ひわるせ給ふ色むし和泉の山川をそなへ
神と崇つり奉れども中比いかのはらなん名
わ[illegible]大山大川ことく[illegible]備給れるふ領ぞ臣事に
こそ侍き

才女　うばめの[illegible]付幽霊代事

又同くいとく世ふくらり侍うばめ[illegible]ア地こそ名
ら[illegible]そ地のりふる八重のえ人ゆく分海のうさ
女そ祝[illegible]ものの[illegible]ものそから揚うり下ら血
ゆそみくそ[illegible]ゆと八生うくとなくとアなうハさう
人[illegible]ら[illegible]な他の地ふ[illegible]ふ[illegible]理ら[illegible]む獄の

事を疑くしを存ゆ[illegible]ん[illegible]ん[illegible]ハ[illegible]生
れいるらく逆のすにうら侍ん[illegible]ア[illegible]ハ
をうにしを姑獲鳥人を取侍極女なと云り云
中記ふを山鳥影神の類なり毛代ねぎて女人とおもう色重物の記て
後なる不なりけれふ物ふれ記わうこのて人乃
子をうりて已う子となるうれふ児の衣類なて取ハ
かふをくをうくん山鳥来て血代なて[illegible]
ねきハを兒驚病を[illegible]うり刑罪ふ面くをうくん
又女子の代ふを山鳥ふ旌は七八月れ代取出

て人に成害をなすこと本朝にもまれなるといふまを伝へ聞かんとかくのごとき形ちにて人間にまじはりをり人を迷はせうとへ出りふふしの相なれふ
そこにじめ産婦の死して後の胎と生
てはかりそこ顔ばかりなるなりしらみ生
而の氣産婦なれば毒となりてとそこさ成分
そこふこそ伝へ或そこ成る魚鳥虫のごと
出又は馬牛尾の蛭になりて類眼あふそ相よ
つて他の胎ときさ出れば産婦のうづみうつるはきさ
ドロ血ときとロ　ゴ　ジ　見形ふう形ち生ときれいふと

あらじ地獄のあ法とんなること氣化死化の
そかのくつかて死の人ふ死ふ又同くいふく
ハ元人間のうんはくきひ死人ハとかく消うを
い胎と伝へ聞くなるハ或そ戦場の沼すに人の
なれきけふあるのきこへいるなるたしさ事ふ
をみ又危伝ふと彭生とドキ者の幽霊きうて
死きふ殺ふ死ひ紙ひ事なると主の陽由形
ふ人見そ傷出ふくいかそ流ばつうれくい
きつへで先生いきくく生死ふこの陽そ出類の
見識ふ人なるそふりを生とそくいりをそ

世の中の事ハ常に變じて居るゆへ人死ぬれバ魂も
わかれちりうせるといふハ常なり万古かくのごとし是
氣の聚(あつま)るハ彰生(せい)なりちるハ変なり万物(ばんぶつ)も
一なり變(へん)とハ常にあらずして一生に一度ある変也
とハバ人の氣かたまりて形(かたち)生じ病死(びやうし)して人へ其
のおのづからかへりもとのところへかへりくさる氣の
なすところにして或(あるひ)ハうらみ死(し)にしてあるひハ剣戟(けんげき)
のうへにて死(し)する者ハその氣も形(かたち)もかへらずちらず
に冤(ゑん)ありてあくまで魂のちりうせずして
てきやうの時にちりうせずして氣ちらずしてそのかたち

かなしさとハいふ人のかたちたものに見えずしてその
氣ハあつまりてその源(げん)を深源(しんげん)とて又同(どう)じくして甚(はなはだ)
氣のおこりハ其氣のあつまりて形(かたち)の変(へん)ずる
事をいふなりや云く天地(てんち)の間(あひだ)に生る物ハみな氣
のあつまりて氣のこころによりて形(かたち)生じた
るハ煙(けむり)のごとくになりてしかもかくしてみえざる時ハかく
うちなくもの也されども其形ハその時に
そくになりたる時ハわかれて氣もなし
質(しつ)ハ始(はじめ)なりされハその氣のちりて或
ハ形(かたち)をなし又ハ其生ずる物を幽霊(ゆうれい)とハいふなれ

と和山様のうまいと強のうるに及びくそそぐ
氣の変ぞうふ消くく消そなり又哲人名僧な
どの変化のうて消うもうもうもうもうもう妖を滅ふ
さざうに理なれハそそ変化のうくそそ勢息に
変もれハなしされハ中着乎和軍由さかぐく
伝し逆后俳薮を討もくそそびて紙わざうみ
かけうに見うどもこそふあまうまして山黄泉びて
眼鏡をうさに見なへふいまうの紙わういに世ふ
僧来の人物どを米かうのでうそうを儀薮を
のハうり事にくうそうみうを見ハ一首の狂歌ふ酔懐

を成し眼(まなこ)ひからし飛ありきてほめく髑髏(どくろ)となりて侍る

なきも侍へるもいはゞいかにとや畢竟(ひつきやう)聖賢(せいけん)神仏(しんぶつ)の

霊(たましゐ)といふのみなく得利生(とくりしやう)のこゝろざしは是も幽霊(ゆうれい)

[illegible]

事やまれかならずさるべき事のこと執(しふ)の心さま多なるまゝ

ばなるめくをこすまじくかくしれぬを執(しふ)念ぞ死(しに)

ざりけれはかゝる類ひあるべき事にてぞ

第六　嫗禄(わう)ぶりの事

一人(ひとり)いはく嫗禄(わう)ぶりといふ物は妊(をつとも)風呂屋(ふろや)に

あらびけるよし申せり古きあまてる屋敷(やしき)など

にも出るよし聞(きこ)えしそも名(な)の起(おこ)りを侍る也

いへる先生(せんせい)いはく此名尤なる義(ぎ)なり凡一切の

物を生ずる本の物をなすを父といふ人は魚(うを)よ

り生まれて出てそれを生(しやう)ずる化(け)がれ

ある故なりされば嫗禄(わう)ぶりとも又産(おん)婦の

気(き)のつよきより化生(けしやう)し出る物なる故(ゆゑ)によるを

禄ぶりて身気(しんき)をやぶり心血(しんけつ)の理(り)なしと答(こた)へ給ふ

第七　雪隠(せついん)のばけ物　付(つけたり)　唐(たう)の李赤(りせき)が事

一人(ひとり)のいはく世に雪隠(せついん)のばけ物といふものゝよし

誰いひ又わかく神なる人をいりもちゐるに於

屋ろ若海のさふらふ家の内疫病乃様
わく目おくびらく男ゆうるとやゆ山事いうかる神
にう光来うく伝ろと申しうハ先生いあうくそ神
ふあへふ対ちそまく箒紙ときゆうがまづたし
なるはし紙ト伝へられともさごうわくびく又唐土を
厠の神紙紫姑神といあうとやむ一寿陽の
李景とふへ業陽の伝の業仁とうる女紙むうへく
思ひとめらせうバ年素海へ祈ちて正月十
八日ふ厠の中わく数をよ彼伝の業卿あを
となせしうバそなほ正月毎ようしく厠の神

とうとひ事あれたこれ紙真仏なうこもいふ
だうだく又伝家ふを鳥駆沙摩明王といふ式家法
の神なりと云ふ神山明王ふ火編わりく毒竜
をとうとひ摩堀紙清めふ功徳ましくけうこれ
伽藍のうばよがふ彩ふをあよ山明王紙を
つをふ書花紙うなへをきて法師ちう悪厠ふ
行対ちれを彩ふ呪紙唱くそふくこ在紙ぬ
ぎうを彩法なうとやさうれを今ハ世の人うあく
あへ彩ぐけうのをそふふ浄ハ紙ハつうれる不の
きいうらびし移柳子原り年る季赤り伝ふ庵

代代の書籍といふものあり孝白の詩歌おほくして
そを目ろ紙つきそうもとかや紙ろの孝赤そをあざ
ちとつまぶしく田舎へ下臣ふそ紀のひかに
くそう変よいふ風う系方へもこいう紙いるさ
しそく洗ふきつ風くはまく山水紙赤々へまろ
ゆつきそいふそう変そやそう方そ古々ふ書子
あり何ろ紙の結ふだといふもそやしそ月そか
風へおりしくといひくいづ地へ風りん行くくんを
ざりろれはそう変ぶちあやそうみくあるをそろふ厠
の中へいりくそを童れ中へ道紙さし入さりお

どつさつまくゆりく汝厠鬼ふ犯れうと云へハ孝
赤ト風う志うとの方へ行て大さちばさふ
ゆろふ何に行きそもどりのふぶやと云そ変
うまこく巫覡を呼くくる刷くはくなどさせて
蟲の若をそくく付紙文ぐにおりく
番ぐものおおさうねる深よ又孝赤んざり
ろきハそうやそう伝ふに今度ハ易紙なりハ糞
穢の中に花しやぐりそ変漸くにつまくゆ
そ陽なそ研びをそれハ孝赤云やう親類方
とのうそびを畳紙しく初臣正紙結なくそ

引くなもちのほひ拍子とて間ぐるまうたをうたひ
にわうばとて三度乗れば明るとまうしぐるく高
ぐんとて人数四五人ばかりなく乗申うたをく
二三十里打うたくさ紀の宿ふとりまうしいうあ色
宴ふくいよりやと思ひくれ共ばしいうぶ李春
孫ふ厠の中ふ蔵入くびなくかりとまうをう
見とぶうなう者ひまざまひと蔵と物をて
勇敢ほうぼうへ人へふくらふ山ふまうとも
見ひとまうを影ばいくかりいとりれを
百物語評判書卷之二終